

近世後期における成瀬家と武家との交際

——成瀬正寿を事例に——

萱田寛也

はじめに

- 一 成瀬正寿の経歴
 - (一) 正寿の活動
 - (二) 正寿の死去と葬儀
 - 二 成瀬正寿の病中・葬儀に見舞いに訪れた武家
 - (一) 分析する史料の構成と特徴
 - (二) 両敬と片敬
 - (三) 姻戚関係の有無
 - (四) 幕閣や家斉側近とのつながり
- おわりに

はじめに

本稿は、尾張藩付家老成瀬家の一九世紀前半の当主正寿まさひさ(天明二年一七八二～天保九年一八三八)を事例に、近世後期の成瀬家と交際をしていた

近世後期における成瀬家と武家との交際

武家の特徴について、主に両敬や片敬にあった大名家や旗本家に注目して考察することを目的とする。後述のとおり、正寿の病中・葬儀・法要に際して、計七〇名以上の大名家・大名家の家臣・旗本家・与力・御家人・尾張藩士・寺院・女中・出入の町人(大工や植木屋など)が見舞いに訪れた。そのうち、大名家や旗本家は約二五〇家を占める。その大半は成瀬家と両敬もしくは片敬にあった。

両敬とは、訪問・応対・書札などの交際に同等の礼を用いることとして把握されている。親しい家同士が取り結ぶ関係であるが、個人的に両敬を結ぶことがあるほか、奥方が主体となつて関係を結ぶこともあった。⁽¹⁾片敬とは、自らが奉仕する主家を卑下し、他人の主家に対してのみ敬称や敬語を用いることとして把握されている。⁽²⁾しかし、片敬の具体像について詳細に扱った研究はほとんどなく、その実像は残念ながら不明な点が多い。

一方で、両敬については研究の蓄積が見られる。研究の嚆矢となつたのは、新見吉治氏の研究である。同氏は、福山藩阿部家を主な事例として、両敬は姻戚団であること、大名同士だけでなく、公卿と大名、大名と旗本

の間にも両敬が結ばれたことを指摘した。⁽³⁾ 同氏の研究以降、松方冬子氏は、諸大名家に残る両敬関係の史料を用いて、両敬は、親・姻戚関係を母体としつつも、血縁関係によらない事例があり、意識的な契約関係という性格を持つこと、老中を輩出するような大名家には、他家からの両敬の申し込みが多くあり、その背景として、幕閣の有力者との関係を保ちたいという意図があったのではないかと指摘した。⁽⁴⁾ その後、松方氏の研究を基に、①奥向を視野に入れた研究、②大名の卒去・葬送における他家との交際、③「御家」存続を目的とした將軍家との縁戚関係強化、④幕末維新期における両敬の特徴に注目が集まっている。①については福田千鶴氏が、松代藩真田家を事例に、「奥の交流・縁戚関係が契機となつて結ばれた両敬関係が表における大名の交流の基盤となつた」と指摘した。⁽⁵⁾ ②については谷川愛氏が、松代藩八代藩主真田幸貫の死去（嘉永五年（一八五二）に伴う葬儀や法要の日程を伝える書状の宛先に注目し、両敬の家に送付する場合は宛先が勝手向であるのに対し、片敬の場合は表向であることを明らかにした。⁽⁶⁾ ③については白根孝胤氏が、尾張徳川家を事例に、尾張藩九代藩主徳川宗睦が、一橋家との間で成立した両敬を基に、將軍家との関係強化を図り、幕政にも影響力を及ぼしたと、両敬が契機となり、一橋家から養子を迎えることが可能になり、縁戚関係が拡大したと指摘した。⁽⁷⁾ ④については篠崎佑太氏が、弘前藩津軽家・館林藩秋元家・津山藩松平家を事例に、幕末維新期では、両敬の構築にあたり、姻戚関係によらない地域的な結びつきも重視されたことを明らかにした。⁽⁸⁾

これまでの研究を通して、両敬は姻戚関係を契機とした親しい家同士の結びつきに留まらず、当時の政治状況とも密接に関連した結びつきになる場合もありうるものと把握できよう。しかし、今までの研究では、大名家

を事例に取り上げる傾向が多かった。これは、史料の制約に加えて、両敬が大名社会のなかで育まれてきた側面を持つことにも起因しているのではないかと考えられる。⁽⁹⁾ ただし、新見氏や松方氏は、両敬の主体が必ずしも大名である必要はなかったこと、相手方に旗本や公家の名前が見られることを指摘した。⁽¹⁰⁾ また、松方氏は両敬の内実については今後の検討課題であると述べている。⁽¹¹⁾ 両氏の指摘を踏まえると、大名以外の階層を事例とした両敬の様相を分析することが、今後の一つの論点となると考えられる。

そこで本稿では、尾張藩付家老成瀬家を主な事例として検討したい。成瀬家は、初代当主正成が幼年より徳川家康に仕え、家康の大御所政権では、駿府政権の年寄として幕政に参画していた。慶長一二年（一六〇七）に家康四男松平忠吉が死去した後、九男の徳川義直が尾張国主を命じられたが、義直が幼年のため、正成は義直の傅役となった。同一五年に正成は家康の命により義直の付家老となったこと、翌一六年に尾張の国政を担っていた平岩親吉が死去したことにより、正成は同じく義直の後見を勤めていた竹腰正信とともに尾張の国政を担うことになる。付家老は世襲制のため次代以降の当主もその役を担った。⁽¹²⁾ 近世を通じて成瀬家は付家老として尾張藩を支える立場にあつたので、大名以外の階層にあたるといえよう。

さらに、本稿で取り上げる正寿は、第一章第一節で詳述するとおり、尾張藩十代藩主斉朝や十一代藩主斉温から重用され、十一代將軍家斉からの信任も厚かった。また、同じく尾張藩付家老竹腰家、紀州藩付家老安藤家・水野家、水戸藩付家老中山家とともに付家老の家格改善にも取り組んだ人物としても知られている。これらの正寿の活動において、大名家や旗本家との交際はいかなる可能性を秘めていたのかという点も併せて分析したい。以上の問題意識のもと、まず第一章では正寿の経歴や葬儀の様子な

どについて述べる。第二章では見舞いに訪れた両敬・片敬の大名家・旗本家に注目し、正寿の交際関係の特徴について考察したい。各家からの見舞いの状況に注目してみると、何回も見舞いの使者を派遣したり、当主本人が訪問したりする家もあれば、ほとんど見舞いを送らない家も存在した。正寿と武家との交流の実態は不明な点が多いが、見舞いの頻度の多寡によつて正寿と武家との親密さの程度が分かるのではないかと思われる。この点を念頭に置き、両敬と片敬の差異・姻戚関係の有無・家格・役職といった観点から検討したい。

一 成瀬正寿の経歴

(一) 正寿の活動

正寿は、天明二年(一七八二)二月三日に先代当主正典の四男として江戸で生まれた。四男であるので、本来ならば家督は長兄が相続するはずであった。しかし、長男正賢は寛政一〇年(一七九八)に死去、次男篤行は安永九年(一七八〇)に旗本の金田家の婿養子(のちに同家から離縁)、三男隆庸は天明四年に旗本小浜家の婿養子となっていた。そのため、寛政一〇年八月に正寿が嫡子に選ばれた⁽¹³⁾。正典の隠居に伴い、文化六年(一八〇九)七月二十九日に家督を相続した⁽¹⁴⁾。正寿は、家督相続後、同八年四月〜同九年三月、同一四年三月〜文政元年(一八一八)三月の二回しか尾張を訪れておらず⁽¹⁵⁾、生涯のほとんどを江戸で過ごした。正寿の活動の特徴として、「はじめに」で述べたように、①斉朝・斉温・家斉との親密な関係、②御三家付家老の家格改善が挙げられる。以下、本節では、先行研究の成果に基づきながら

右の二つの点について紹介したい。

まず①斉朝・斉温・家斉との親密な関係について説明したい⁽¹⁶⁾。正寿が家督を相続した時の尾張藩主は斉朝であった。斉朝は、もともと家斉の弟である一橋治国の子として寛政五年に生まれた。同八年に叔父の斉敦の養嗣子となり、同一〇年四月一三日に尾張藩主宗睦の養子となった。同一一年一月一九日には家斉の長女淑姫を正室に迎えた。その後、宗睦の死去に伴い、同一二年一月二九日に家督を相続した。斉朝が宗睦の養子になった背景として、宗睦の後継者候補が相次いで死去するという状況があった。宗睦には治休・治興の二人の男子がいたが、それぞれ安永二年・同五年に二一歳で亡くなったので、高須松平家から甥の治行を養子に迎えたが、治行も寛政五年に三四歳で死去した。治行の嫡子の五郎太も同六年に一四歳で亡くなったので、弟勝長の男子勇丸を養子に迎えたが、勇丸も同七年に三歳で死去した。そこで、同八年に家斉の四男敬之助を養子にしたが、敬之助も翌年に死去した。

このような状況の中で藩主に就任した斉朝を支える正寿であったが、斉朝の官位昇進にあたって尽力した際⁽¹⁷⁾など、斉朝から刀や時服などを褒美として拝領されることがあった。また、將軍家斉からの信任が厚く、私的に複数回面会することもあった。後者の点については、その要因として、篠田壽夫氏は以下の二点を挙げている⁽¹⁸⁾。第一は淑姫の存在である。淑姫は家斉の初子で寵愛を受けていて、淑姫が大奥へ年礼登城をした際に正寿も同行していた。その際に家斉から反物を下賜されるなど淑姫を介して正寿は家斉と交流を持つことができた。第二は、正寿が、家斉の一九男直七郎(のちの斉温)を斉朝の養子にさせることに尽力したからである。斉朝には子息がいなかったため、文政五年六月一三日に直七郎(文政二年五月二九日に誕

生)を養子とした。

斉朝は文政一〇年に三五歳で隠居し、家督を斉温に譲った。しかし、斉温はまだ九歳であった。そのため、斉朝は同年九月一七日に正寿に対して「御行状等ハ勿論、猶更方端無斟酌申上相勤候様」と、幼年の斉温の行動に注意して忬度ないように接することを求めた。その後、斉温の成長に貢献した正寿は、家斉よりその労をねぎらわれ、鞍と鎧を下賜された。

次に②御三家付家老の家格改善についてである。²⁰幕府に対して付家老待遇改善を求める動きは、文化一三年に水戸藩付家老の中山信敬が老中水野忠成に、八朔五節句の江戸城単独登城、將軍御目見を陳情したことにはじまる。その後、同じく御三家付家老の紀州藩の安藤・水野両家、尾張藩の成瀬・竹腰両家も運動に加わる。文政二年一〇月に信敬が中風のため致仕した後は、安藤家と正寿が中心的な役割を果たした。そして、同七年一月三〇日に正寿に対して「重き御役をも相勤候家柄ニ付、八朔五節句御礼申上候様可被成候」と、八朔五節句の単独登城が安藤家とともに認められた。また、翌八年には残りの中山・水野・竹腰の三家の単独登城が認められたほか、天保四年(一八三三)二月には五家全部の月次登城が実現している。正寿には同月一三日に「厚き御願之趣も有之候間、月次御礼申上候様可被成候」と月次御礼の登城が許可されたので、二日後に登城して羽目之間において、家斉と家慶に面会している。²³

(二) 正寿の死去と葬儀

前節で述べたように文政期から天保初期にかけて付家老の家格改善に注力した正寿であったが、天保六年ごろからしばしば足の痛みを訴えるよう

になる。たとえば天保六年九月八日には、明日の重陽の節句に際しての江戸城への登城を、足の痛みのため取りやめることを届け出ている。²⁴

さらに三年後の天保九年六月中旬になると持病の痰気が悪化し始めたため、正寿は侍医の薬を服用する。²⁵しかし、七月上旬から肺の状態も悪くなった。正寿の病状を心配した斉温は、尾張藩奥医師の勝田三雪に対して、朝と夕方に正寿の屋敷を訪問して丁寧な治療をすること、定期的に斉温まで病状を報告することを命じた。²⁶その後も斉温は、頻繁に正寿を見舞う使者や手紙を送っている。斉温だけでなく、福君(斉温継室)・斉朝も同様に見舞いの使者や手紙を送った。ただし、尾張藩主家の見舞いはこの時に始まったわけではなく、正寿が体調をくずした際には、その都度見舞いを実施している。足の痛みが出始めた天保六年頃も正寿に対して、斉温や斉朝は見舞いの書状を送付していた。²⁷これらの点を踏まえると、尾張藩主家は、正寿の体調を常に気にかけていたことがうかがえる。特に斉温は、幼少期から正寿が傅役として近くで仕えていたので、正寿の健康状態には一層気を揉んでいたことだろう。

ところが、三雪の治療を受けても正寿は快復しなかったため、次に江戸幕府奥医師の小川汶庵の診察を受けた。汶庵が招かれた経緯は不明であるが、文政九年六月三日と同一二年四月二九日に乗蓮院(斉朝生母)の治療に尽力した褒美としてそれぞれ御扶持十人分を与えられているので、その縁で招かれたのかもしれない。さて汶庵の治療の効果があつたためか、正寿の体調は快復した。しかし、八月中旬より再び体調が悪くなり、江戸幕府奥医師の多紀安叔の診察を受けた。加えて、尾張藩奥医師渡辺道需・桑名藩主松平定永侍医磐瀬玄策・江戸の町医師清川玄道が相談して薬を調合して処方したが、効果はなかった。一〇月二三日頃からさらに病状が悪化し

たため、安叔や玄道が毎日診察をするようになる。それでも快方に向かわず、同二六日の夜九つ時には重態になったため、家老や江戸詰の家臣が出仕する。また、安叔や玄道に対して、診察に来るように早馬で呼びに行かせるが、間もなく正寿は危篤状態になってしまった。家老をはじめ家臣は、正寿のもとに見舞いに向かうものの、同二七日に正寿は、麴町の成瀬家江戸屋敷にて死去した。

正寿の死後、さっそく葬儀の準備が進められた。⁽²⁹⁾埋葬場所は、宝成寺(曹洞宗、下総国葛飾郡栗原郷)に決まった。同寺はもともと法城寺もしくは宝浄寺と表記されていたが、正成が家康から栗原郷の八つの村々の領地を与えられた折に、成瀬の「成」をとって宝成寺に改名したという。⁽³¹⁾同寺には、正成の次男の之成・之成の息子の之虎など一部の成瀬家の人々の墓もある。⁽³²⁾正寿以前の成瀬家の当主は、正成の菩提を弔うために義直が寛永二年(一六二五)に開山した白林寺(臨濟宗、尾張国愛知郡)で埋葬されることが多かった。⁽³³⁾正寿が宝成寺に埋葬された理由は不明だが、生涯の大半を江戸で過ごしたことや、江戸で死去したことが要因ではないかと思われる。なお、遺髪は白林寺に納められた。

並行して棺の製作・葬儀に際しての家臣の役割分担・関係者に対しての葬儀や法事の実施通知・入棺や葬送日時決定などが進められた。入棺や葬送については、吉となる日時を調べた結果、入棺が一〇月二八日の未の刻、葬送が一一月六日の亥刻になった。

そして、一一月六日の亥刻に正寿の棺が麴町屋敷から宝成寺に向けて出発する。出棺に際して、正住(正寿の嫡子、次の成瀬家当主)・鏐(正住の室)・鍮次郎(正住の弟)・富貴(正住の妹)などが直接正寿のもとに見舞いに訪れた。前日には斉温や福君からも代理の焼香があった。⁽³⁴⁾棺は麴町屋敷を出発

した後、九段坂を通り、小川町を抜けて両国の回向院にて小休憩をした。そして、堅川を渡って、逆井にて昼食をとった後、市川の関所を経由し、八幡村(下総国葛飾郡)の東昌寺で小休憩をして宝成寺に到着した。同寺において、同月八日から一〇日にかけて法事が実施され、正住や鏐などは家臣に代理で焼香などをさせた。斉温・福君・斉朝からも使者を介して香典が渡された。⁽³⁵⁾

二 成瀬正寿の病中・葬儀に見舞いに訪れた武家

(一) 分析する史料の構成と特徴

成瀬家と大名家・旗本家との交際を考察するにあたり、「舜徳院様御病中以来正住公御蒙中迄御見舞等右御挨拶御使者手扣調同奉札調并払使調」⁽³⁶⁾(以下、「御使者手扣調同奉札調并払使調」と表記)という史料に注目したい。この史料は、前半部分に各大名家・大名家の家臣・旗本家・尾張藩士・寺院・女中・出入の町人(大工、植木屋など)が、それぞれ正寿の病中・葬儀・法要のどのタイミングで見舞いに訪れたのか書き留めている。後半部分は「御使者手控・奉札・払使下調」として、見舞いに訪れた大名家・旗本家・尾張藩士・寺院などに対して、成瀬家がどのような方法で返礼をしたのか記録している。返礼の種類として、使者の派遣・奉札の送付・「払使」があった。特に大名家や旗本家については、「御両敬御大名様方江御使者手控」・「御両敬御大名様方江之御奉札調」・「片敬御大名様方江御使者手控」・「片敬御大名様江之奉札調」・「御両敬御旗本様江之奉札調」・「片敬御旗本様江奉札調」と両敬・片敬ごとに返礼手段に応じて分類したうえで記

録している。史料の内表紙に「戊六月下旬舜徳院御病中御卒去并正住公御贖中迄万御見舞留」と「天保九稔戌十月の調之至十二月」と記されているので、正寿が体調をくずした天保九年（一八三八）六月下旬から正住の喪中の期間までに見舞いに訪れた家を記録していること、同年一〇月から一二月にかけてこの史料を作成したことが読み取れる。作成者が判明する情報は同史料には記載されていないが、正寿のもとに見舞いに訪れた家のリストという性格の史料であることを踏まえると、江戸詰の家臣が作成したものと考えるよいだろう。

【表一】は、「御使者手控・奉札・払使下調」のうち、「御両敬御大名様方江御使者手控」・「御両敬御大名様方江之御奉札調」・「片敬御大名様方江のタイミングで正寿の見舞いに訪れたのか一覧にしたものである。

まず注目すべきこととして、大名への返札方法を記録した部分であるにもかかわらず、一部の旗本・尾張藩士・寺院が含まれていることが挙げられる。旗本では石河貞大（表一―三、留守居）・大久保忠誨（表一―二、西丸側衆）・成瀬藤蔵（表一―一五、小納戸）・小浜平大夫（表一―一六、家定小納戸）・青山幸敬（表一―一七、中興小性）・水野忠篤（表一―一九、御側御用取次）・由良貞靖（表一―一五五、高家）・牧野成著（表一―一六〇、側衆）の八名が該当する。尾張藩士では、鈴木嘉十郎（表一―二二）・矢部謙克（表一―一五三）・五味千之丞（表一―一五四）・志水半之丞（表一―一六四）・石河光茂（表一―一六八）・渡辺寧綱（表一―一七二）が該当する。謙克のみ用人で、残りの六名は年寄である。さらに寺院として東本願寺（表一―一九六）も含まれている。

正寿の見舞いに訪れた旗本家の大半については、「御両敬御旗本様江之奉札調」・「片敬御旗本様江奉札調」のいずれかに記録されている。⁽³⁷⁾しか

し、右で挙げた旗本家が大名家に分類して記録されている理由は不明である。

【表一】の「名前」欄には大名当主の名前を記載しているが、大名当主に加えて、その家族も見舞いを実施している場合もある。たとえば、京極高行（表一―一三三）は、「不軽之節」の際に使者を派遣し、「御悔」・「御出棺後」に奉札を送付しているので該当する欄に○を付しているが、「飛騨守様御病中御見廻御使者来」というように父親の高有も正寿の病中に見舞いの使者を派遣していた。本来であれば、各家の誰がどの時期に見舞いの使者や奉札を送ったのか、逐一記載すべきであるが、情報量が膨大となるため、【表一】には各家の当主本人の事例のみ掲載している。⁽³⁸⁾

続いて表の各項目について説明したい。表の項目には、各家が使者の派遣もしくは奉札の送付によって見舞いを実施した時期のうち、「御病中」・「不軽之節」・「御大切之節」・「御悔」・「御出棺後」と明記されている時期を取り上げた。「御使者手扣調同奉札調并払使調」には、正寿の初法事・四十九日法要・正住の喪中の際に見舞いの使者もしくは奉札を送った家や、葬儀後に菓子や野菜を献上した家についても記されている。しかし、これらに該当する家は、その大半が「御病中」・「不軽之節」・「御大切之節」・「御悔」・「御出棺後」のいずれかに正寿への見舞いを実施している。よって、本稿では煩雑さを避けるためにも割愛した。

「御病中」・「不軽之節」・「御大切之節」・「御悔」・「御出棺後」が示す具体的な時期は明記されていないが、それぞれ正寿の病中・重症・危篤・死去直後・出棺以降と理解してよいだろう。【表一】では、これらの時期に見舞いの使者や奉札を送った家は、「使者」もしくは「奉札」の欄にそれぞれ○で表記した。一部の家においては、当主本人や藩医が見舞いに訪れ

る場合があったので、当主本人の場合は○、藩医の場合は△で「使者」の欄に表記している。また、見舞いの回数を明記している場合があるので、その場合は括弧内にその数を記した。したがって、○としか記入していない家は、見舞いの回数が一回なのか複数回なのか不明であることも意味する。

幾つか具体的な事例を挙げて説明しよう。米沢新田藩主上杉勝義(表一―七九)の場合は、「不軽之節奉札来、御悔使者来、奉札も来」と記されているので、「不軽之節」欄のうち「奉札」欄に○、「御悔」欄の「使者」と「奉札」の両方の欄に○を付した。上田藩主松平忠優(表一―五〇)の場合には、「不軽之節奉札来、御悔奉札来、御尽七日御見廻奉札来」と記されているので、「不軽之節」と「御悔」の「奉札」欄に○を付した。一方、「御尽七日御見廻奉札」、つまり正寿の四十九日法要の際に送付した見舞いの奉札については、表では該当する項目を設けていないので、表に反映されていない。また、柳沢光昭(表一―九七)と藤堂高祇(表一―九八)にはどの項目にも○が付されていない。これは、光昭や高祇がどちらも正寿の霊前へ菓子や香木を、使者を介して供えたのみであり、表中の項目には該当しないことによる。

以上の項目は、「御使者手扣調同奉札調并払使調」の前半部分から判明する。一方、「関係」欄や「返札」欄に記載した情報は、同史料の後半部分の「御使者手控・奉札・払使下調」から判明する。前述のとおり、後半部分では、見舞いに訪れた大名家・旗本家への返札方法について両敬・片敬ごとに分類して記録しているので、これを基に「関係」欄に両敬・片敬のいずれに該当するかを記入した。なお、空白の欄は、両敬や片敬関係が無かった家である。

「返札」欄には、成瀬家の返札方法について記している。「御使者手扣調同奉札調并払使調」には、返札方法の基準として次のように記されている。

一 御大名様方御見廻・御悔等二付、御使者来候分ハ此方様も御使者之事、奉札ニ而御見廻・御悔等之御方様へハ奉札之事

一 御旗本様へハ御出・御使者たりとも御挨拶奉札遣し候事

大名家の場合、見舞いとして使者が訪ねてきたら、返札も使者を派遣すること、奉札が送られた場合は、返札も奉札を送ることを原則とした。一方で旗本家の場合は、使者だけでなく当主本人が見舞いに訪れたとしても、返札は基本的に奉札だった。したがって、成瀬家においては、旗本家と比較して大名家をより丁重にもてなそうとする意識があったことがうかがえる。また、旗本家であっても【表一】に記載されている旗本家は、成瀬家にとつて大名家と同じ扱いをする家として認識していたことも推察できる。実際に西丸側衆の大久保忠誨(表一―二二)は、「御病中」や「御悔」の際に使者を派遣しているが、成瀬家側から返札として「御忌明ニ付右御札以御使者被仰進候」と忌が明けてから使者を派遣することを明記している。

なお、右の史料に続く部分では、見舞いに訪れた尾張藩士・与力・御家人・町人・浪人・大名家の家臣・寺院への返札方法の基準についても次のように記されている。

一 市谷万石衆・御年寄様へハ御使者、御用人已上も御使者ニ相成候事

但御用人已上御状来候分ハ御返札、山村甚兵衛殿へハ奉札ハ爰許

ニ而遣ス

一 御用人已下物頭已上払使之事、物頭已下は都而受捨之事

一 与力衆・御家人衆払使之事

但坊主衆・同心衆受捨之事、町医師・浪人之類勿論受捨

一諸家様御家老参上之分ハ払使之事

但御家老之外ハ受捨之事

一寺院ハ都而奉札遣し候事

但御□し餅・読経・諷経等ニ付金子被下置候寺院ハ奉札ニ不及
候事

尾張藩士のうち万石以上・年寄・御用人以上へは返札として使者を派遣することが基本であったが、書状による見舞いの場合は返札も書状であった。物頭以上御用人以下の藩士は「払使」という返札、物頭以下は特に返札をしなかった。「払使」の詳細は不明だが、正寿の病中や死去後も度々見舞いに訪れた御書院番頭の細井藤助について、「忌明ニ付右御挨拶以使申入候」と記録されているので、正寿死去の忌が明けた後に成瀬家から派遣した使者であると推測できる。幕府与力や御家人衆への返札は「払使」で、坊主・同心・町医師・浪人からの見舞いへの返札は無かった。大名家の家臣の場合は、家老が直接見舞いに訪れた時のみ「払使」を派遣し、寺院に対しては、金銭を送付した寺院を除き、奉札の返札をした。

以上、「御使者手扣調同奉札調并払使調」の記載内容について説明してきた。続いて第二節以降では、【表一】に記載されている両敬・片敬の大名家を中心に、両敬と片敬・姻戚関係の有無・家格・役職など幾つかの視点から正寿の交際の特徴を探りたい。

(二) 両敬と片敬

そもそも成瀬家が各家と両敬や片敬を結んだ経緯はどこに求められるの

であろうか。両敬を結んだ背景については、第三節で述べるように姻戚関係が一つの要因だったと思われるが、姻戚関係が確認できない家も多く、いつから何を契機に関係を結んだのか大半の事例では不明である。

片敬についても両敬と同様に関係が結ばれた経緯は不明である。「はじめに」で述べたとおり、片敬は他家に対してのみ敬語を用いることと研究史では把握されることが多い。ただし、成瀬家より家格が劣る尾張藩士も、大名家や旗本家と同様に片敬に含まれており、成瀬家において片敬という言葉が持つ意味合いは、再検討する必要があるといえる。

さて、成瀬家と両敬や片敬になっていた家はどれぐらいの数に及ぶのであろうか。【表一】に掲載したとおり、大名家については、一部の旗本・尾張藩士・寺院を含めて、両敬が五二家、そのうち成瀬家から返札として使者を派遣した家が四一家、奉札を送付した家が一家になる。片敬は八八家で、そのうち返札として使者を派遣した家が四六家、奉札を送付した家が四二家となる。「御両敬御旗本様江之奉札調」に記載されている旗本家は二六家、「片敬御旗本様江奉札調」に記載されている旗本家は九七家である。正寿の見舞いに訪れなかった家もあるかもしれないが、少なくとも成瀬家と両敬の武家は七八家、片敬の武家は一八五家になる。

他の大名家の事例と比較すると、両敬・片敬にある家の数はどのように評価できるであろうか。松方氏は、近世後期の二一の名名家に残る両敬関係の史料を基に、両敬の相手数の家をA(一〇万石以上の外様藩)・B(五万石以下の外様藩)・C(五〜一〇万石前後の譜代藩)の三つに分類して整理している³⁹⁾。同氏は、Aに分類される前田家は五家(すべて大名)、(B)に分類される仙石家は七六家(大名五一家・旗本二四家・公家一家)、Cに分類される土屋家は一一六家(大名八七家・旗本二九家)というように、A↓B↓Cの順に両

敬の相手数が増えていくことを紹介した。併せて、Aに分類される家は家格が高く、両敬相手にも相応の家格を求めていたため、数が少なくなる傾向にある一方、Cに分類される家は幕府の役職に就くことが多いので、相手方から両敬を求めることになり、両敬相手数も多くなるのだろうと見通しを示した。もちろん時期による違いや、家によっておかれた状況が違うので、一概に比較することは難しいが、相手数だけみれば成瀬家の場合はBに分類される家に近いといえる。

次に見舞いの頻度という観点では、両敬・片敬の差異は見られるであろうか。【表一】を確認してみると、両敬の家の方が、片敬の家よりも「御病中」・「不軽之節」・「御大切之節」・「御悔」・「御出棺後」のそれぞれの時期に見舞いを送った事例が多いことが、全体的な傾向として読み取れる。由良貞靖(表一―五五)や牧野成著(表一―六〇)のように、片敬であっても当主本人が見舞いに訪れる事例はあるが、両敬にある家の方が片敬にある家よりも交際が密だったのではないかと考えられる。

(三) 姻戚関係の有無

続いて両敬関係構築の一つの契機とされている姻戚関係に注目したい。【表二】で網かけをした家が、成瀬家と姻戚もしくは縁戚関係があったことが明らかな家である。該当する家と成瀬家がどのような関係にあったのかを一覧にしたものが【表二】である。

【表二】から読み取れるとおり、成瀬家と姻戚・縁戚関係があった家は二二家確認できた。そのうち両敬であった家は二〇家である。成瀬家では、姻戚が両敬関係構築の一つの要因であったことは間違いないといえよう。

しかし、成瀬家と両敬の武家は計七八家なので、姻戚関係がなくても両敬の関係にある家も一定の割合を占めていたといえる。

さて、【表二】に記載した家のなかでも、家によって見舞いの頻度に差があった。大久保忠保(表一―八)は、正寿の病中に使者を二回派遣しているうえ、その他の時期にも使者を派遣している。また、青山幸敬(表一―七)にいたっては、正寿の病中に幸敬自身が一二回も見舞いに訪れている。

【表二】には記載していないが、幸敬の父幸詮は、正寿の病中に一四回も見舞いに訪れていた⁽⁴⁰⁾。反対に森川俊民(表一―五二)は、正寿の見舞いとして「御悔」の際に奉札しか送付していない。

見舞いの頻度に差がある背景として、正寿との関係性の近さが考えられるよう。見舞いの頻度が多かった忠保は、正寿の正室である延寿院の実家にあつた。また、幸敬は正寿の義理の甥にあつた。一方、俊民は、先祖の氏後の女が成瀬正成の正室であつた。俊民の場合は、成瀬家と姻戚関係があつたのが初代正成の時期なので、正寿の代になると、両敬といえどもそこまできかわりが深くなつたのではないかと考えられる。

一方で、成瀬家との姻戚関係が確認できなくても、見舞いの頻度が多い家も存在した。たとえば、内藤頼寧(表一―二)・鈴木嘉十郎(表一―二)・石河貞大(表一―三)・九鬼隆国(表一―四)・松平頼繩(表一―五)が挙げられる。

その中でも特に内藤頼寧からの見舞いの多さは目をひく。頼寧は、「御病中」・「不軽之節」・「御大切之節」・「御悔」・「御出棺後」の全ての時期において、見舞いに訪れているが、特に「御病中」の時期には、頼寧自身が二回・使者が八回・藩医が二回訪問し、奉札も六回送付している。他の大名家よりも見舞いの回数が多いので、生前の正寿は頼寧と親しく交流していた可能性が考えられる。残念ながら、正寿がいつからどのような契機で頼

寧と親しくなったのかは不明である。頼寧は文政三年に家督を相続したのち、文政九年から奏者番に就いているが、正寿が江戸城に登城した際に公務で面会した以外に二人が接触した記録は管見の限り確認できない。⁽⁴¹⁾

しかし、頼寧と尾張徳川家には縁戚関係があった。宗睦の弟頼多^{よりかす}（尾張藩八代藩主宗勝一二男）が、宝暦十一年（一七六一）三月一六日に高遠藩主内藤頼由^{よりゆき}（頼寧の四代前の藩主）の養子となっていたのである。また、頼寧自身も尾張藩の江戸屋敷を訪問する機会があったようである。⁽⁴²⁾したがって、もしかしたら、尾張徳川家とのつながりをきっかけに頼寧と正寿が親しくなったのかもしれない。

ただし、正寿が頼寧と親しく交流していた可能性があることは、以下の点で興味深い。正寿没後の時期ではあるが、安政五年（一八五八）一月の徒目付・小人目付による風聞探索書の中では、頼寧について次のように述べている。⁽⁴⁴⁾

国持国主等江時々罷越、折二振、先方らも罷越し候程ニ而、厚交り、酒宴等相催し候義も有之趣、既ニ駿河守登城之上者、御政事向相勤居候軽輩之者共者勿論、坊主等迄、馴々敷御座敷おゐて、暫面談いたし候義、度々見受者も有之、尤引合候逆、機密を申聞候与申訳二者有之間敷候得共、諸侯江親み居り候様子ニ而者、疑惑之儀無之共難申、徒目付や小人目付は、頼寧が国持大名と互いの間を行き来して、酒宴などを交えて親しく交流していること、登城した際には、幕政にかかわる者や坊主たちと城内で話し込んでいることを紹介したうえで、頼寧を通じて幕政上の秘密が幕閣でない大名家にも漏れてしまう可能性があることと警戒している。安政五年当時の頼寧は既に若年寄を辞職した身であったが、頼寧が幕府内外の情報を収集できる立場にあったことがうかがえる。⁽⁴⁶⁾もちろん

天保九年以前の頼寧が、安政期と同様に幕府内外の豊富な情報を持っていたとみなすことは難しい。しかし、将来的に若年寄を勤めうるような家と親しく交流することにより、正寿は幕政にかかわる情報を入手できる可能性があったといえる。

(四) 幕閣や家斉側近とのつながり

最後に、どのような家格や役職の家から見舞いがあったのかという点について注目したい。

まず家格について殿席に注目したい。【表一】に掲載されている大名家のうちそれぞれの家の殿席は、大廊下が二家（両敬一家・片敬一家）、溜間が六家（両敬一家・片敬五家）、大広間が一・二家（両敬二家・片敬九家）、その他一家、帝鑑間が三・四家（両敬一八家・片敬二六家）、柳間が三七家（両敬六家・片敬三〇家・その他一家）、雁間が一八家（両敬二二家・片敬六家）、菊間一二家（両敬三家・片敬八家・その他一家）となる。大まかな傾向として、当時の成瀬家と交際していた大名のうち、帝鑑間・柳間・雁間の各席に詰める大名家の割合が高く、特に帝鑑間や雁間の大名家とは両敬の關係であることが多かった。帝鑑間や雁間は幕府の役職就任者が多い席であり、⁽⁴⁷⁾実際に天保九年当時本丸老中を勤めていた脇坂安董（表一〇、帝鑑間）や水野忠邦（表一七八、雁間）の名前などが【表一】に見える。安董については、成瀬家と両敬のうえ、正寿の「御病中」や「御悔」の際には使者の派遣も奉札の送付もどちらも実施しているので、両家の間にはある程度の交流があったことが読み取れる。このように、当時の成瀬家では、幕閣になりうる殿席の大名家と親しく交際する場合もあったことがうかがえる。

また、江戸城の奥空間に出入りする役人からも見舞いがあつたことも注目し得る。中奥小性を勤めていて、正寿とも縁戚関係があつた青山幸敬からの見舞いについては第三節で述べたが、その他にも小納戸の成瀬藤蔵(表一―一五)・小浜平大夫(表一―一六)とも姻戚・縁戚関係があつた。さらに留守居の石河貞大(表一―一三)とも両敬関係にあり、三人とも正寿の「御病中」には当主本人が直接見舞いに訪れている。加えて、片敬関係にあつた側衆の牧野成著(表一―一六)も正寿の「御病中」には五回も成著自身が見舞いをしているほか、家斉の御側御用取次を担った水野忠篤(表一―二九)とは両敬の關係であり、「御病中」を除く各時期に忠篤から見舞いがあつた。

両敬・片敬を問わず、大名家よりも旗本家の方が、当主本人が直接見舞いに訪れる傾向があるとはいへ、將軍家斉の側近ともいえる人物たちから直接見舞いがあつたことは、彼らと正寿の間に一定程度の親しさがあつたことの現れといえる。頼寧とのネットワーク、幕閣も勤める譜代大名家との親密さも併せて考えると、正寿は複数の手段から幕政や將軍の動向にかかわる情報を入手できる立場にあつたといえる。

おわりに

本稿冒頭で述べた通り、正寿の病中―葬儀において見舞いに訪れた人々は、大名家・大名家の家臣・旗本家・与力・御家人・尾張藩士・寺院・女中・出入の町人など七〇〇名以上に及ぶ。幅広い身分階層からの見舞いがあつたことは、それだけ当時の人々にとって、正寿の死去が大きな出来事であつたと思われる。第一章で述べたように、それは尾張藩主家にとって

も例外ではなかつた。正寿は、斉温の幼少期から傳役となつて養育に尽力していた。そのため、斉温は、正寿の病中から頻繁に見舞いを送り、死去の際にはその死を悼んだ。

第二章では、見舞いに訪れた人々のうち、特に両敬や片敬にあつた大名家や旗本家に焦点を当てて、①両敬と片敬、②姻戚・縁戚関係、③家格、④役職といった観点から見舞いの頻度を分析し、その多寡からどのような武家が正寿と親しく交流していたのか検討した。①両敬と片敬を比較すると、両敬の方が正寿との交際は密であつたことが明らかとなつた。②姻戚・縁戚関係に注目してみると、正寿との縁戚が近い家と親密な交際があつた。その一方で、姻戚・縁戚関係になくても成瀬家と両敬にあつた家も見られ、その中には正寿と親しく交流していたと思われる家もあつた。

③家格では、帝鑑問や雁間に詰めるような譜代大名の家と両敬の傾向があり、④役職では、両敬・片敬を問わず、老中・若年寄など幕閣を勤めた家や、江戸城の奥に出入りする家と盛んに交流があつた。そして、これらのネットワークを通じて、正寿は幕政に関する情報や將軍の動向など豊富な情報を手に入れることができたのではないかと指摘した。したがって、正寿は両敬や片敬をベースに構築した人的ネットワークを活用することで、付家老の待遇改善を有利に進めることができたのではないかと考えられる。

一方で残された課題も多い。第一は、本稿でも指摘したとおり、成瀬家が両敬・片敬を結んだ背景である。姻戚関係にない家と両敬を結んだことは指摘したが、その経緯について具体像を明らかにする必要がある。第二の課題は、生前の正寿と各家との交流の実態である。本稿では、見舞いの頻度が多い家を、正寿と親しく交流していた家と判断して論を展開した

が、そもそも実際の交流はどのようなものであったのか、周辺史料を含めて考察する必要がある。

註

- (1) 松尾美恵子「藩主家とその交際・婚姻」(上越市史編さん委員会編『上越市史通史編4 近世二』(上越市、二〇〇四年)、松方冬子「両敬」(松尾美恵子・藤實久美子編『大名の江戸暮らし事典』(柘風舎、二〇二一年))。
- (2) 新見吉治「両敬と片敬」(『日本歴史』八一号、一九五五年)一〇頁。
- (3) 前掲新見「両敬と片敬」三頁。
- (4) 松方冬子「両敬の研究」(『論集きんせい』一五号、一九九三年)。
- (5) 福田千鶴「真田家の交流―寛政期を中心に―」(『松代』二二号、二〇〇七年)一〇頁。
- (6) 谷川愛「近世大名の葬送と交際」(『国史学』一九三号、二〇〇七年)。
- (7) 白根孝胤「尾張家における「両敬」の形成と将軍権威」(岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』(第四編)『清文堂出版、二〇〇九年])。
- (8) 篠崎佑太「幕末・維新期における両敬関係の構築とその意義」(『古文書研究』八二号、二〇一六年)。
- (9) 松方氏は、両敬関係を「管見の限り近世の大名社会で発展した慣習」ではないかと述べている(前掲松方「両敬」四四八頁)。
- (10) 前掲新見「両敬と片敬」、前掲松方「両敬の研究」、同「両敬」。
- (11) 前掲松方「両敬」四四八頁。
- (12) 犬山城白帝文庫歴史文化館編『付家老のお仕事 家康が尾張藩を託した成瀬と竹腰』(公益財団法人犬山城白帝文庫、二〇一九年)七頁。
- (13) 寛真理子「『正寿公御伝』 解題」(犬山城白帝文庫『研究紀要』一六号、二〇二二年)。
- (14) 犬山城白帝文庫歴史文化館編『図説 犬山城』(公益財団法人犬山城白帝文庫、二〇一四年)八八頁。
- (15) 「両家在江戸在尾州吟味頭書」(徳川林政史研究所所蔵旧蓬左文庫一三九―

- 二二二)。
- (16) 主に篠田壽夫「成瀬正壽と家格回復―正壽公御伝の世界―」(犬山城白帝文庫『研究紀要』四号、二〇一〇年)、藤田英昭「尾張徳川家「押付」養子に関する一考察―天保一〇年の遺領相続問題を中心に―」(徳川林政史研究所『研究紀要』五六号、二〇二二年)、前掲寛「『正寿公御伝』 解題」を参照。
- (17) 「正寿公御伝」八、天保五年二月二十九日条(犬山城白帝文庫所蔵、成瀬家文書一七七)。同史料は正寿の誕生から死去までの記事を編年形式で九冊にまとめたもので、定例の献上・拝領・拝礼のほか、幕府や藩主への届書、老中奉書なども書き留められている(前掲寛「『正寿公御伝』 解題」)。
- (18) 前掲篠田「成瀬正壽と家格回復―正寿公御伝の世界―」。なお、同氏は同論文において、尾張家に嫁いだ姫君や、他家へ嫁いだ姫君からも正寿が信頼を得ていたことも紹介している。
- (19) 「正寿公御伝」五、文政一〇年九月一七日条。
- (20) 前掲篠田「成瀬正壽と家格回復―正寿公御伝の世界―」のほか小山譽城「付家老の大名化志向」(同『徳川御三家付家老の研究』(清文堂出版、二〇〇六年))を参照。
- (21) 「正寿公御伝」四、文政七年二月三日条。
- (22) 「正寿公御伝」八、天保四年二月一三日条。
- (23) 「正寿公御伝」八、天保四年二月一五日条。
- (24) 「正寿公御伝」八、天保六年九月八日条。
- (25) 正寿の病氣療養の様子については、「御前舜徳院様御違例不軽御容体ニ付取扱且御卒去御新葬御初法事一件留」(犬山城白帝文庫所蔵、成瀬家文書三二五)を主に参照。
- (26) 「正寿公御伝」九、天保九年七月一日条。
- (27) 「正寿公御伝」八、天保六年八月八日条、十一月二日条など。
- (28) なお、弘化二年(一八四五)八月二日にも、齊荘の療養に尽力したとして扶持を与えられている(『藩士名寄』第二二冊、徳川林政史研究所所蔵旧蓬左文庫一四〇―四)。
- (29) 正寿の葬儀についても前掲「御前舜徳院様御違例不軽御容体ニ付取扱且御卒

去御新葬御初法事一件留」を主に参照。

- (30) 正成は、家康の関東入部後、栗原郷に四〇〇〇石を与えられた。その後加増を受けた正成は、次男之成に二万四〇〇〇石を分知したので、之成は栗原郷を在所とする栗原藩を立てた(犬山城白帝文庫歴史文化館編『犬山城成瀬家拝領四〇〇年記念特別展 成瀬正成一代記』(公益財団法人犬山城白帝文庫、二〇一七年)。しかし、之成の次の藩主之虎が五歳で没し、嗣子が無かったため、同藩は断絶となった。

- (31) 「下総栗原宝成寺由来書写」(犬山城白帝文庫所蔵、成瀬家文書八五五)。

- (32) 正成は宝成寺で火葬され、遺骨は遺言により日光の家康廟の近くに葬られた(前掲犬山城白帝文庫歴史文化館編『犬山城成瀬家拝領四〇〇年記念特別展 成瀬正成一代記』四七頁)。

- (33) 「御法号附御略系」(犬山城白帝文庫所蔵、成瀬家文書一八九三)。同史料によると、成瀬家二代当主正虎・三代当主正親・四代当主正幸・五代当主正泰が白林寺に埋葬された。なお、正寿の次の当主正住やその次の当主正肥も白林寺に埋葬された。

- (34) 「正寿公御伝」九、天保九年一月五日条。

- (35) 斉温と福君からは、一月八日に香典としてそれぞれ白銀一〇枚と三枚が渡された。斉朝からは同月二二日に同じく香典として白銀五枚が渡された(「正寿公御伝」九、天保九年一月八日条・二二日条)。

- (36) 犬山城白帝文庫所蔵、成瀬家文書四〇六。

- (37) なお、「御向敬御旗本様江之奉札調」には二六家、「片敬御旗本様江奉札調」には九七家が記録されている。

- (38) ただし、島津斉宣(表一―一三三)・林忠旭(表一―六六)・阿部正篤(表一―七三)・藤堂高栴(表一―九八)・松平定剛(表一―一三八)は、いずれも天保九年当

時の藩主ではない。「御使者手扣調同奉札調并払使調」中に当主の名前が見られず、右の五名の名前しか見られなかったためである。

- (39) 前掲松方「両敬の研究」四一―四六頁。

- (40) 幸詮は正寿の弟にあたるが、もともと正寿の長兄正賢の子息であった(前掲「御法号附御略系」)。

- (41) 「正寿公御伝」六、文政一二年九月九日条など。

- (42) ただし、頼多は家督相続前の明和八年(一七七二)一月一日に死去した(前掲白根「尾張家における「両敬」の形成と將軍權威」九四―九五頁)。

- (43) 「内藤家十五世紀」文政五年一〇月条に「大和守尾州家工参邸ノ節躑躅ノ間工通候様取極メラル」と記されている(長谷川正次・伊那市立高遠町図書館編『高遠町図書館資料叢書 第七一号 高遠藩資料(十二) 内藤家十五世紀(十)』(十二)「伊那市立高遠町図書館、二〇二二年」九頁)。同書「はじめに」(長谷川正次執筆)によると、「内藤家十五世紀」は、明治後期に旧高遠藩士の小松利時によって作成された詳細な藩史である。

- (44) 「十一月 徒目付榊原榮五郎同河野忠蔵小人目付佐藤直次郎同齋藤紀兵衛屈書」(東京大学史料編纂所編『大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料十三』(東京大学、一九八三年)二九三―二九四頁)。

- (45) 天保一一年から同一二年まで若年寄を勤めていた。

- (46) 松方氏は、本文中で紹介した事例に加えて、加賀藩前田家と二本松藩丹羽家の関係構築の仲介者に頼寧がいた事例を紹介し、頼寧を「大名たちの親分的な存在」と評価している(松方冬子「「不通」と「通路」―大名の交際に関する一考察―」『日本歴史』五五八号、一九九四年)八一―八二頁)。

- (47) 大石学編『江戸幕府大事典』(吉川弘文館、二〇〇九年)のうち「雁間」・「帝鑑間」の項目(望月良親執筆)。

表1 成瀬正寿の病中・葬儀の見舞いに訪れた大名家

番号	名 前	居城・居所	殿席	御病中		不軽之節		御大切之節		御悔		御出棺後		関係	返礼
				使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札		
1	内藤頼寧	信濃/高遠藩	雁間	◎(2) ○(8) △(2)	○(6)	○			○	○	○	○		両敬	使者
2	鈴木嘉十郎	尾張藩士		◎(2) ○ (10)	○	○		○		○		○		両敬	使者
3	石河貞大	旗本		◎(1) ○(2)	○	○				○				両敬	使者
4	九鬼隆国	摂津/三田藩	柳間	◎(1)	○		○	○		○	○	○		両敬	使者
5	松平頼繩	常陸/府中藩	大広間	○(3)	○(2)	○		○		○		○		両敬	使者
6	戸田氏庸	美濃/大垣藩	帝鑑間	○(3)	○	○			○	○			○	両敬	使者
7	奥平昌猷	豊前/中津藩	帝鑑間	○(2)	○(1)	○		○		○		○		両敬	使者
8	大久保忠保	下野/烏山藩	雁間	○(2)	○	○		○	○	○		○		両敬	使者
9	永井尚佐	美濃/加納藩	雁間	○(2)	○	○		○		○		○		両敬	使者
10	脇坂安董	播磨/竜野藩	帝鑑間	○(1)	○(3)					○	○			両敬	使者
11	水野忠義	駿河/沼津藩	帝鑑間	○(1)	○(1)			○		○		○		両敬	使者
12	大久保忠誨	旗本		○(1)	○		○			○			○	両敬	使者
13	島津齊宣	薩摩/薩摩藩	大廊下	○/△	○	○	○			○				両敬	使者
14	竹腰正富	尾張藩付家老		◎(4) ○(1) △(3)		○		◎(1) ○(1)		○		○		両敬	使者
15	成瀬藤蔵	旗本		◎(2) ○(2)		○		○		○				両敬	使者
16	小浜平大夫	旗本		◎(1) ○(1)		○		◎/○		○		○		両敬	使者
17	青山幸敬	旗本		◎ (12)		○		◎/○		○		○		両敬	使者
18	織田信古	丹波/柏原藩	柳間	○(2)		○		○		○		○		両敬	使者
19	遠藤胤統	近江/三上藩	菊間	○(2)		○				○		○		両敬	使者
20	井上正滝	下総/高岡藩	菊間	○(2)			○	○		○			○	両敬	使者
21	松平光庸	信濃/松本藩	帝鑑間	○(1)						○				両敬	使者
22	稲葉幾通	豊後/臼杵藩	柳間	○		○		○	○	○			○	両敬	使者
23	中山信守	水戸藩付家老		○		○			○	○	○	○		両敬	使者
24	加藤明邦	近江/水口藩	帝鑑間	○			○		○	○	○	○		両敬	使者
25	堀田正篤	下総/佐倉藩	帝鑑間	○				○	○	○				両敬	使者
26	松平直寛	出雲/広瀬藩	帝鑑間	○						○	○	○		両敬	使者
27	水野忠実	上総/鶴牧藩	雁間		○(1)	○	○		○	○				両敬	使者
28	内藤政優	三河/挙母藩	帝鑑間		○					○		○		両敬	使者
29	水野忠篤	旗本				○	○		○	○		○		両敬	使者
30	田沼意留	遠江/相良藩	雁間			○			○	◎		○		両敬	使者
31	松平信豪	丹波/亀山藩	帝鑑間			○				○			○	両敬	使者
32	水野勝進	下総/結城藩	帝鑑間			○				○				両敬	使者
33	京極高行	但馬/豊岡藩	柳間			○				○			○	両敬	使者
34	本庄宗発	丹後/宮津藩	雁間			○								両敬	使者
35	堀直央	越後/村松藩	柳間				○		○	○	○		○	両敬	使者
36	松平忠侯	肥前/島原藩	帝鑑間				○		○	○				両敬	使者
37	井上正春	上野/館林藩	雁間				○			○			○	両敬	使者

近世後期における成瀬家と武家との交際

番号	名 前	居城・居所	殿席	御病中		不軽之節		御大切之節		御悔		御出棺後		関係	返礼
				使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札		
38	松平信順	三河/吉田藩	雁間				○			○			○	両敬	使者
39	酒井忠方	出羽/松山藩	帝鑑間				○			○				両敬	使者
40	石川総和	伊勢/亀山藩	帝鑑間							○			○	両敬	使者
41	板倉勝職	備中/松山藩	雁間							○			○	両敬	使者
42	植村家教	大和/高取藩	帝鑑間				○		○	○			○	両敬	奉札
43	黒田斉溥	筑前/福岡藩	大広間				○		○	○			○	両敬	奉札
44	青山幸哉	美濃/郡上藩	雁間				○		○	○			○	両敬	奉札
45	青山忠良	丹波/篠山藩	雁間				○		○	○				両敬	奉札
46	真田幸貫	信濃/松代藩	帝鑑間				○		○	○				両敬	奉札
47	間部詮勝	越前/鯖江藩	溜間次				○			○			○	両敬	奉札
48	松平忠栄	摂津/尼崎藩	帝鑑間				○			○			○	両敬	奉札
49	建部政醇	播磨/林田藩	柳間				○			○			○	両敬	奉札
50	松平忠優	信濃/上田藩	帝鑑間				○			○				両敬	奉札
51	本多正寛	駿河/田中藩	雁間				○			○				両敬	奉札
52	森川俊民	下総/生実藩	菊間							○				両敬	奉札
53	矢部謙克	尾張藩士		◎(5) ○(8)	○	◎/○		○		◎			○	片敬	使者
54	五味千之丞	尾張藩士		◎(4) ○(1)	○	○		◎		◎/○			○	片敬	使者
55	由良貞靖	旗本		◎(2) ○(1)	○(4)			○		○				片敬	使者
56	水野忠央	紀伊藩付家老		◎(1)	○	○	○			○			○	片敬	使者
57	松平斉厚	石見/浜田藩	大廊下	○(1)	○					○				片敬	使者
58	上杉斉定	出羽/米沢藩	大広間	○	○	○				○				片敬	使者
59	安藤直裕	紀伊藩付家老		○	○					○	○	○		片敬	使者
60	牧野成著	旗本		◎(5) ○(1)		◎/○		○		○			○	片敬	使者
61	安藤信由	陸奥/磐城平藩	雁間	○(1)						○				片敬	使者
62	牧野忠雅	越後/長岡藩	帝鑑間	○(1)										片敬	使者
63	毛利元義	長門/長府藩	大広間	○		○	○			○				片敬	使者
64	志水半之丞	尾張藩士		○		○				○			○	片敬	使者
65	三宅康直	三河/田原藩	帝鑑間	○						○				片敬	使者
66	林忠旭	上総/貝淵藩	菊間	○										片敬	使者
67	南部信誉	陸奥/七戸藩	柳間		○	○				○	○			片敬	使者
68	石河光茂	尾張藩士			○	○							○	片敬	使者
69	稲垣長剛	志摩/鳥羽藩	帝鑑間		○		○			○				片敬	使者
70	鳥居忠挙	下野/壬生藩	帝鑑間		○					○	○			片敬	使者
71	内藤正繩	信濃/岩村田藩	菊間		○					○				片敬	使者
72	渡辺寧綱	尾張藩士			○					○				片敬	使者
73	阿部正篤	陸奥/白河藩	雁間			○	○			○				片敬	使者
74	松平頼誠	陸奥/守山藩	大広間			○				○			○	片敬	使者
75	松平忠彦	武蔵/忍藩	溜間			○				○			○	片敬	使者
76	浅野齐肃	安芸/広島藩	大広間			○				○				片敬	使者
77	柳沢保興	大和/郡山藩	帝鑑間			○								片敬	使者
78	井伊直亮	近江/彦根藩	溜間				○		○					片敬	使者
79	上杉勝義	出羽/米沢新田藩	柳間				○			○	○			片敬	使者

番号	名 前	居城・居所	殿席	御病中		不軽之節		御大切之節		御悔		御出棺後		関係	返礼
				使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札		
80	一柳頼紹	伊予/小松藩	柳間				○			○	○			片敬	使者
81	亀井茲方	石見/津和野藩	柳間				○			○			○	片敬	使者
82	伊東祐相	日向/飫肥藩	柳間				○			○				片敬	使者
83	松平斉貴	出雲/松江藩	大広間							○	○			片敬	使者
84	山野辺義親	水戸藩家老								○			○	片敬	使者
85	三浦為章	紀州藩家老								○			○	片敬	使者
86	久野純固	紀州藩家老								○			○	片敬	使者
87	渡辺潔綱	和泉/伯太藩	菊間							○				片敬	使者
88	水野忠邦	遠江/浜松藩	雁間							○				片敬	使者
89	細川斉護	肥後/熊本藩	大広間							○				片敬	使者
90	鍋島直堯	肥前/小城藩	柳間							○				片敬	使者
91	中川久教	豊後/岡藩	柳間							○				片敬	使者
92	松浦 熙	肥前/平戸藩	柳間							○				片敬	使者
93	土井利祐	三河/刈谷藩	雁間							○				片敬	使者
94	京極高朗	讃岐/丸亀藩	柳間							○				片敬	使者
95	大村純顕	肥前/大村藩	柳間							○				片敬	使者
96	東本願寺	浄土真宗								○				片敬	使者
97	柳沢光昭	越後/黒川藩	帝鑑間											片敬	使者
98	藤堂高秣	伊勢/久居藩	柳間											片敬	使者
99	柳沢里顕	越後/三日市藩	帝鑑間		○(2)									片敬	奉札
100	織田秀陽	大和/柳本藩	柳間		○									片敬	奉札
101	北条氏喬	河内/狭山藩	柳間		○									片敬	奉札
102	本多康禎	近江/膳所藩	帝鑑間		○									片敬	奉札
103	六郷政恒	出羽/本荘藩	柳間				○				○		○	片敬	奉札
104	南部利济	陸奥/盛岡藩	大広間				○				○		○	片敬	奉札
105	秋元久朝	出羽/山形藩	雁間				○				○		○	片敬	奉札
106	稲垣定国	近江/山上藩	菊間				○				○		○	片敬	奉札
107	遠山友寿	美濃/苗木藩	柳間				○				○		○	片敬	奉札
108	津軽信順	陸奥/弘前藩	大広間				○				○		○	片敬	奉札
109	谷 衛 昉	丹波/山家藩	柳間				○				○			片敬	奉札
110	酒井忠学	播磨/姫路藩	溜間				○				○			片敬	奉札
111	木下利愛	備中/足守藩	柳間				○				○			片敬	奉札
112	堀 之 敏	越後/椎谷藩	菊間				○				○			片敬	奉札
113	土方雄嘉	伊勢/菰野藩	柳間				○				○			片敬	奉札
114	土屋彦直	常陸/土浦藩	雁間				○				○			片敬	奉札
115	小笠原忠固	豊前/小倉藩	溜間				○				○			片敬	奉札
116	有馬頼徳	筑後/久留米藩	大広間				○				○			片敬	奉札
117	松平乗利	三河/奥殿藩	菊間				○				○			片敬	奉札
118	仙石久利	但馬/出石藩	柳間				○				○			片敬	奉札
119	京極高琢	讃岐/多度津藩	柳間				○				○			片敬	奉札
120	小出英菴	丹波/園部藩	柳間				○				○			片敬	奉札
121	織田信学	出羽/天童藩	柳間				○				○			片敬	奉札
122	松平容敬	陸奥/会津藩	溜間				○				○			片敬	奉札
123	松平信宝	出羽/上山藩	帝鑑間				○				○			片敬	奉札
124	内藤政義	日向/延岡藩	帝鑑間				○						○	片敬	奉札

番号	名 前	居城・居所	殿席	御病中		不軽之節		御大切之節		御悔		御出棺後		関係	返礼
				使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札	使者	奉札		
125	内藤政民	陸奥/湯長谷藩	帝鑑問				○						○	片敬	奉札
126	保科正丕	上総/飯野藩	帝鑑問				○							片敬	奉札
127	溝口直溥	越後/新発田藩	柳間				○							片敬	奉札
128	片桐貞信	大和/小泉藩	柳間				○							片敬	奉札
129	内田正道	下総/小見川藩	菊間				○							片敬	奉札
130	一柳末延	播磨/小野藩	柳間								○		○	片敬	奉札
131	毛利元世	長門/清末藩	柳間								○			片敬	奉札
132	大久保仙丸	相模/小田原藩	帝鑑問								○			片敬	奉札
133	関成煥	備中/新見藩	柳間								○			片敬	奉札
134	堀直格	信濃/須坂藩	柳間								○			片敬	奉札
135	山口弘封	常陸/牛久藩	菊間								○			片敬	奉札
136	相馬充胤	陸奥/中村藩	帝鑑問								○			片敬	奉札
137	岡部長和	和泉/岸和田藩	帝鑑問								○			片敬	奉札
138	松平定剛	伊予/今治藩	帝鑑問								○			片敬	奉札
139	加藤泰理	伊予/新谷藩	柳間								○			片敬	奉札
140	青木重竜	摂津/麻田藩	柳間								○			片敬	奉札
141	鳥津忠徹	日向/佐土原藩	柳間				○								
142	永井直養	大和/新庄藩	菊間								○				
143	毛利慶親	長門/萩藩	大広間								○				

「舜徳院様御病中以来正住公御矚中迄御見舞等右御挨拶御使者手扣調同奉札調并払夫調」（犬山城白帝文庫所蔵、成瀬家文書406）より作成。

- ・原則として、藩主の名前は「大成武鑑(天保9年)」巻1・2(国立国会図書館デジタルコレクション)に掲載されている名前に従った。
- ・網かけの家は成瀬家との姻戚・縁戚関係が確認できる家である。
- ・「殿席」欄は前掲「大成武鑑(天保9年)」巻1・2、高田綾子「殿席別大名一覧」(松尾美恵子・藤實久美子編『大名の江戸暮らし事典』〈椋風舎、2021年)を参照した。

表2 成瀬家と姻戚・縁戚関係がある家

番号	名前	居城・居所	関係	続柄
6	戸田氏庸	美濃/大垣藩	両敬	延寿院(正寿の室)の養母の従弟。
7	奥平昌猷	豊前/中津藩	両敬	鏐(正住の室)の兄弟。
8	大久保忠保	下野/烏山藩	両敬	忠喜(忠保の養祖父)が延寿院(正寿の室)の父。
9	永井尚佐	美濃/加納藩	両敬	尚典(尚左の嫡子)が鏐(正住の室)の姉の婿。
14	竹腰正富	美濃/今尾	両敬	竹腰正信(正富の祖先)が光照院(正虎の継室)の実父。
15	成瀬藤蔵	旗本	両敬	正育(藤蔵の父)が正寿の姉妹と縁組。
16	小浜平大夫	旗本	両敬	父が正寿の兄隆庸。隆庸は小浜家に養子入り。
17	青山幸敬	旗本	両敬	父幸詮が正寿の弟(実は正賢の子)。幸詮は青山家に養子入り。
21	松平光庸	信濃/松本藩	両敬	光和(光庸の4代前の当主)が貞祥院(正典の室)の甥。
22	稲葉幾通	豊後/臼杵藩	両敬	正住の相婿。
31	松平信豪	丹波/亀山藩	両敬	貞祥院(正典の室)の兄弟の婿。
32	水野勝進	下総/結城藩	両敬	富貴(正寿の娘)と縁組。
35	堀直央	越後/村松藩	両敬	堀直利(直央の祖先)の女が正泰の妹の生母。
39	酒井忠方	出羽/松山藩	両敬	鏐(正住の室)の姉の婿。
40	石川総和	伊勢/亀山藩	両敬	正典の相婿。
41	板倉勝職	備中/松山藩	両敬	重宗(勝職の祖先)の室が正虎の妹。
42	植村家教	大和/高取藩	両敬	延寿院(正寿の室)の姪の婿。
48	松平忠栄	摂津/尼崎藩	両敬	貞祥院(正典の室)の兄弟の婿。
51	本多正寛	駿河/田中藩	両敬	正重(正寛の祖先)の女が妙琳(正成の継室)。
52	森川俊民	下総/生実藩	両敬	氏俊(俊民の祖先)の女が林鐘院(正成の室)。
64	志水半之丞	尾張藩士	片敬	忠継(半之丞の祖先)の室が亀(正虎の女)。
133	関成煥	備中/新見藩	片敬	長治(成煥の祖先)の室が高運院(正親の女)。

「御両敬記」(犬山城白帝文庫所蔵、成瀬家文書1244-4)・「御法号附御略系」(犬山城白帝文庫所蔵、成瀬家文書1893)・「成瀬家譜(尾張犬山)」(東京大学史料編纂所所蔵)・小川恭一編『寛政譜以降 旗本家百科事典(第1巻)』(東洋書林、1997年)を基にして作成。

・「番号」欄は【表1】の番号欄に対応。